

第1回新宿区文化芸術振興会議（第3期） 議事要旨

- 開催日時 平成26年10月23日 午前10時から午前12時まで
- 開催場所 新宿区役所本庁舎6階 第4委員会室
- 出席者 中山弘子新宿区長
委員 垣内恵美子 高階秀爾 星山晋也 根本晴美 乗松好美 松井千輝 原口秀夫
大和滋 佐藤清親 舟橋香樹（欠席 大野順二）
*敬称略、文化芸術振興基本条例に規定する分野別の順
- 事務局 加賀美地域文化部長 橋本文化観光課長 原文化観光係長 楠原主任 香取主事

■議事の進行

- 1 開会
会長選出までの間、加賀美地域文化部長及び橋本文化観光課長が会議の進行を務めた。
- 2 委員の委嘱
事務局が委員の紹介を行った後、中山区長が各委員に委嘱状を交付した。
*任期：平成26年9月9日から平成28年9月8日まで
- 3 区長あいさつ
中山区長が、会議の開催にあたり、挨拶を述べた。

〈あいさつ要旨〉

- ・文化芸術振興会議は、今年9月から第3期の活動が新たに始まった（平成22年9月に設置）。
- ・第1期委員の提言に基づいて実現した新宿フィールドミュージアムは、新宿の秋を彩る文化イベントとして毎年確実に規模を拡大し、内容も充実させている。
- ・第2期の会議では、新宿文化センターの在り方と運営方針について、中間のまとめの報告をいただいた。課題等を十分に検証し、区内における文化芸術振興の核となる施設として、更なる魅力の向上に努めていかねばならない。
- ・今年4月には一般社団法人新宿観光振興協会が官民連携で発足し、6月から本格的に活動を始め、よりオール新宿を意識して新宿の観光振興の取り組みを進めている。
- ・新宿のまちはビシターズ産業によって、来街者が集まることで活性化しているまちであり、都市観光として、従来の名所・旧跡を訪ねるといった観光とあわせて、都市における人々の活動、文化や芸術、ショッピング、飲食、あるいはその都市の人々との交流といった視点が大切である。
- ・その都市の魅力を体験してもらうことで、都市を訪れる方々がこのまちは楽しい、わくわくする、気持ちがいいと思い、リピーターとなってもらえるし、また、都市の担い手になってもらえる。
- ・文化芸術振興を進めることは、まちを魅力的にし、人々の活動に共感を持ってもらうことにつながっていく。暮らしやすさと文化性を持った賑わいが、活発で交流のあるまちをつくっていく。
- ・まちの元気をつくり出し、人々がよく生きるという意味での豊かさをつくり出す文化芸術の振興が確実に進められることを、そして新宿のまちが本当に生き生きと交流があり、その交流が多く文化を生み出し、持続可能な都市であり、歩きたくなるまちと思えるような新宿となっていくことを願っている。
- ・この文化芸術振興会議は単なる審議機関ではなくて、新宿区の文化に関わる取り組みや事業の進行管理という、とても重要な役割を持っている。この会議に寄せる思いはとても強く、各委員にはぜひこれからも力を貸していただきたい。

4 会長の選出

新宿区文化芸術振興会議規則第4条第1項及び第2項の規定に基づき、委員の互選により、全員一致で、高階委員を会長として選出した。

5 会長あいさつ

高階会長が、会長就任にあたり、挨拶を述べた。

6 副会長の指名

新宿区文化芸術振興会議規則第4条第2項に基づき、高階会長が垣内委員を副会長として指名した。

7 議事

- (1) 本日の進行は、次第によることとし、議事については、事務局からの資料説明の後、質疑等を含めて意見交換を行うことを確認した。また、検討内容の取りまとめと資料として保存することを目的として、会議の録音及び撮影について、各委員の了承を得た。
- (2) 「新宿区文化芸術振興会議の運営（進め方）について」
資料2に基づき、事務局が一括して説明を行い、第3期の活動は資料のとおり運営することが確認された。
- (3) 「新宿区文化芸術振興会議の調査審議事項について」
資料3並びに参考資料2及び3に基づき、第1期・第2期の調査審議事項の報告及び新宿区における文化芸術の振興状況の説明を行った。
- (4) この会議で審議する独自テーマについて、専門部会で整理をして、次回会議で決定することが確認された。なお、専門部会の設置及び専門部会員の指名は、意見交換後に行った。
- (5) 意見交換

【以降、意見交換】

- ・2020年 東京オリンピック・パラリンピック競技大会（以下「東京オリンピック」という。）に向けての取り組みを考える際に、オリンピック・パラリンピック競技大会（以下「オリンピック競技大会」という。）はスポーツの祭典ということだけではなく、文化の祭典でもあるということも「オリンピック憲章」で謳われている。
- ・ロンドンオリンピック競技大会のときには文化プログラムが非常に活発に行われたようで、実際に調べたわけではないが、2008年から2012年の間に、予算的には1億3,000万ポンド、230億円くらいの予算が投じられて英国全土、1,000件以上の場所で18万件に及ぶプログラムが行われたと聞いている。
- ・企業メセナ協議会では東京での2020年に向けて、文化プログラムをどう盛り上げていこうかということが非常に話題になっている。
- ・企業メセナ協議会は芸術文化振興による社会創造について考えており、芸術文化を振興すること自体が目的ではなく、その先に、振興することを通じて社会をよりよくしていこうということを目的として活動している。全ての国民の創造性による創造的な社会の実現、あるいは多様な文化の相互理解による世界平和の実現、文化資本の循環による創造的経済の実現という非常に壮大な目標を掲げている。
- ・この2020年に向けた文化プログラムの基本的な考え方として、単発的なプログラムが発生するのではなく、その後に社会のありようとしてよりよい姿になるということを目指そうという話がなされている。

- ニッセイ基礎研究所の研究理事、企業メセナ協議会の理事の吉本光宏氏の論文では、日本の文化特性が海外から非常に注目されていて、古くから市民が多様な芸術活動に深く関与している、あるいは、市民自身が芸術の鑑賞者であると同時に創造者でもある、そしてハイカルチャーと大衆文化の境界が曖昧であるということ論じている。
- 非常に高齢化した社会でありながら高齢者がとても元気で、文化とスポーツに勤しんでおり、新聞の俳句コーナーへの日常的で活発な投稿であったり、ダンススクールが非常に多かったりする1つ1つが、新しいこれからの成熟社会のモデルになるのではないかと。東京オリンピックを契機にして、日本は文化の国だということの世界に積極的に発信していこうとも論じている。
- 企業メセナ協議会でも、その地域社会における文化振興、あるいは世界レベルでの文化交流等、少子高齢化社会における課題解決を目指した文化振興を重点項目として幾つか挙げているが、新宿区はそういったビジョンを実現していくための要件を十分に備えていると思われるので、2020年に向けた新宿区としての文化振興ビジョンを設定できないか。
- 区内では多彩なプログラムが常に行われているし、アジア系を中心とする多くの国の方たちが住んでいる等、文化的資源も非常に多いので、更にこれを効果的に活用し、そのための方法、手段として東京オリンピックの文化プログラムという軸のもとに、新宿フィールドミュージアムを再編集していくことができると、より大きなビジョンになって新宿区のブランドが更に価値が上がっていくのではないかと。
- ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）が創造都市（クリエイティブシティ）ネットワーク事業を行っており、日本でも金沢、名古屋、福岡といった都市が創造的な文化の営みと革新的な産業活動の連関でまちを元気にしていくということで次々に創造都市に認定されている。
- 可能かどうかかわからないが、東京でも新宿区が創造都市の認定を目指していくことは、私たち区民の意識や力を結集する方法論の1つとなるのではないかと。
- 東京都立総合芸術高等学校は新宿フィールドミュージアムへの参加が3回目となるが、文化祭では2日間で4,376人、舞台表現科の前期成果発表会では700人と、多くの方に会場いただき、生徒たちの励みになった。
- 学校行事で美術科の生徒が横浜トリエンナーレに行ってきたが、どの会場も若い人が多く来ていた。今年は映像作品がかなり多くを占めてきているというのが大きな特徴だったように感じた。
- 例えば、新宿フィールドミュージアムを基盤に、ピエンナーレかトリエンナーレという形で軸となるようなイベントを企画できれば、「新宿」で自分の作品が上映できるというような、1つの登竜門的な意味合いが位置づけられるものに発展するのではないかと。
- 芸術文化を発展させるためには、熟年層もパワーがあるが、やはり若年層をどう取り込むかということが非常に大きな課題であろうと考えている。
- 新宿区に所在している、文化芸術に理解がある企業から協賛を得て、新宿文化センターを会場にクラシック・バレエやコンテンポラリーダンス等舞台芸術のコンペティションを設ける等はどうか。
- 公益社団法人日本芸能実演家団体協議会では新宿区と文化協定（新宿区における文化芸術振興に関する協定書）を結び、旧淀橋第三小学校という廃校を活用して稽古場兼事務所として芸能花伝舎を運営しており、オープンから来年でちょうど10年、非常に人の賑わう良いスポットになっている。
- 文化芸術振興基本条例の制定の際の懇談会では、新宿の歴史、地域の資源、文化資源や社会的に見えにくかった文化事業を顕在化させようという議論があり、また、それぞれの資源をネットワーク化しようという第1期会議での調査審議事項があったが、新宿フィールド

ミュージアムの取り組みを通して、それぞれの事業が結びついてきて、多彩な取り組みが社会的に明らかになってきていると実感している。

- 新宿フィールドミュージアムの発展と並行して、ネットワークの核になるものとして、新宿文化センターの在り方が非常に重要になってくるだろうということで、第2期会議では「新宿文化センターの在り方と運営方針」が調査審議事項となった。中間のまとめという形で区長に報告したが、この問題は第3期でも早い時期に議論し、次の展開を考えていきたい。
- 新宿区では、漱石山房復元に向けての取り組みが進められていたり、観光振興として一般社団法人新宿観光振興協会ができたり、いろいろなことが進められている。
- 新宿文化センターを中心として区のビジョンを作っていくのか、東京オリンピックに向けたプログラムかはわからないが、これからの文化施策の見直しと総合化を図れるといい。
- 新宿フィールドミュージアムのパンフレットからもわかるとおり、非常に多様な事業があるし、外部から来た人間は、こうやって冊子にまとまっていると非常にわかりやすい。
- こんなにたくさんの文化芸術イベントを展開することに、新宿区がこれほどまで関わっているということに実際驚くし、取り組んでいることの目次としては、これで十分である。
- 今の時代が一番の特徴は、やはり東京オリンピックが近づいてきて、日本国民全体の気持ちが盛り上がっているということだと思う。
- オリンピック競技大会はスポーツだけではなく文化にも力を入れるという考えのもと、国民もそのように思っている社会風土のようなものがある。このトレンドを踏まえて、新宿区としてどのような取り組みを展開していくのか。
- 例えば、今、旅行業界では、神社仏閣といった名所・旧跡というカードをいかに見せるかということに非常に腐心しているようだが、やはりソフトが重要となってくる。美術館にも同じことが言えるが、今の世の中のトレンドは、住民といかに触れ合うかということだと思う。
- 東京オリンピックは、訪日外国人が日本国民の素養や民度の高さに触れるよい機会であり、このことを活用して、逆に国民自身も更に民度を高められるし、訪れてくれた人たちとの交流を通じて相手の印象にも残り、日本国という国に対して、また、新宿という地域に対しての一定の認識、親しさ、見識を共有してもらおうということができるのではないかと。
- 神社、仏閣、美術館等のハードを見たということに更にプラスして、こうしたことが大きな意味合いを持つように感じる。
- 新宿には、文化芸術振興の目次は新宿フィールドミュージアムのようにしっかりとつくられているので、この中身をいかに訪れてくれた人に対してソフト面で、気持ち面で提供できるのか、地域住民がどのような気持ちを訪れた人々と共有できる、あるいは共有しようと思っているのか、文化芸術振興会議ではこうした点を議論できないか。
- 先日、大原美術館で開催された私立美術館の館長会議に参加したが、開催していた秋のお祭りを通じて、倉敷というまちは民度がとても高いと感じた。
- 倉敷では、秋祭りの1つとして、個々人の家を会場にオープンハウス形式で自慢の屏風等を披露しており、その家の人々が観光客をもてなしていた。お客様には外国の方もいたので、英語ができる人は英語で説明していたが、そこはおもてなしの気持ちなので、拙い言葉でもかまわない。
- 日本では安全、清潔等は基本的に全部クリアしているので、更にプラスして海外からのお客様に対してアピールできるものとしては、やはり文化とか素養の高さ、深さ、温かさといったものがあると思う。
- 訪れてくれる人、あるいは東京オリンピックをきっかけに海外から来てくれる人に対して気持ちよく対応することができれば、とても意味のあることではないか。
- ハード面についてはここまで整備されている中で、では新宿区民としてどんなソフト面をど

のようにトレーニングするか、おもてなしといった心の面を深めることにどのような意味があるのかということ、抽象的ではあるが、この会議において考えられたらいいのではないかと。

- これからも新宿というまち、新宿らしさというところを育てていかななくてはならないし、まちも人も生息していくので、育てていかななくてはならないのは子ども世代だと思う。
- 子どもたちを文化にどのように関わらせていくかが今後の課題である。
- 新宿区としてすでに様々な取り組みが進められている中で、文化等に関心がない人は、残念だが、せっかくいいものをつくっても目を通していただけないということがある。
- 今後の課題としては、いかにいろいろな人を取り込んでいけるか、そしていろいろな人を巻き込んで活発化していけるかということにあるのではないかと。
- 全般的な大きな課題の中で、ひとつひとつの課題について話し合っていく、それをいかに区民等に伝え、いかに理解を得るかということまで突き詰めていくことが必要ではないかと。
- この新宿フィールドミュージアムの冊子はとてもよくできているが、イベントカレンダーのページがあると、更にわかりやすくなると思う。
- 新宿区の乳幼児文化体験事業は、区との協働事業提案が採択された時期から実施しており、9月に実施した乳幼児向け観劇会「はじめてのおしばい」は、特に0～3歳のニーズがとても高く、応募の半数以上を断る状況だった。
- 子どもを持つとどうしても文化活動から離れる時期になってしまうが、0～3歳児に着目することで親世代も参加しやすい雰囲気を得られるため、こうした事業に区が取り組んでもらえることは、大変ありがたい。
- 子どもを守る環境が整えられている一方で、昨年の子どもの貧困率はOECD（経済協力開発機構）加盟の34カ国中25位という結果が出ており、政府としても子どもに対する対応を閣議決定されたようだ。
- 子どもたちには文化に対してできるだけ公平なスタートを切らせてあげたい。
- 「子どもの生きる力」ということが言われている中で、文化というものはやはり生きる力を引き出す意味でとても大切なことであり、引き続き「子どもに文化を」ということを考えていきたい。
- 大久保という地域は、江戸幕府鉄炮組百人隊という区の登録無形民俗文化財がある。
- 戸山小学校では6年生が総合学習で地域について勉強しているが、江戸幕府鉄炮組百人隊保存会の会長や大久保つつじを地域で育てている地区協議会の方を学校に呼び等、地域と文化と子どもたちをつなぐスクールコーディネーターという活動がある。
- この地で300年、400年前から住み、文化的活動があることを知ることは子どもたちが地域への愛着をもつことにつながり、子どもたちがこの新宿を本当に愛するようになるのではないかと。地域への愛着が湧くということは、これからの新宿を担っていく子どもたちを育てていく力になっていくと思っている。
- 子どもたちもオリンピック競技大会にはすごく着目しており、それこそ東京オリンピックが決まったときに、戸山小学校の6年生が海外の方たちをどうやっておもてなしするかというテーマで都の賞を取った。
- 子どもたちの中にもオリンピック競技大会というのは確実に根づいてきていると実感し、教育現場でも生かされていると感じた。
- 自身もこの大久保地域で子どもを2人育てていく中で、子どもが小学校4年生のときに東郷青児（記念損保ジャパン日本興亜）美術館に子どもたちがお世話になったが、新宿区の子どもは皆、「あっ、ひまわりの美術館ね」とわかる。
- 実際に生の本物の芸術文化に触れることによって、子どもたちの心の中に着実に文化の花が

開いているし、大学生になった息子が地方の友人に東京を紹介するときに、新宿でたまたま時間が空いたから東郷青児（記念損保ジャパン日本興亜）美術館を案内したと聞くと、やはり子どもたちの中に一粒の文化の種が花開いていると実感した。

- パイプオルガンは中古市場がとて賑わっているようだ。新宿文化センターのパイプオルガンはこのまま放っておくのはもったいないし、世界中で中古市場があるのならば、放っておかず、売却するという手もあると聞いている。海外の中古市場のニーズも調べてみたらよいのではないか。
- 広告業界の方に新宿フィールドミュージアムのパンフレットをすごく褒めていただいた。サイズがちょうどよく、手に持って、少し時間ができたときにぱらぱらと見やすい。広報物のいい例として、機会があれば紹介するという言葉をいただくともに、総合プロデューサーをつけて整理したらもっといいものになるだろうというエールもいただいた。
- 地名も重要な文化遺産である。地名変更があって昔の地名がかなり失われていくのは問題であり、そういう土地の記憶も残していつてもらいたい。
- 新宿フィールドミュージアムイベントの開催、実施までに大変な苦労があったと思うが、この3期目の議題として、この取り組みを更に発展させていけたらよいのではないか。
- すでに非常に広範囲で多くのイベントが開催されているが、より発展させるためには、核となる場所やソフトを絞っていくとよりよくなると思う。
- 区民にとっては、例えばこのくらいの時期にあそこに行けば毎年何かやっているというイメージを持っているということは非常に大切なことだ。
- 東京オリンピックの開催は重要であり、非常に殺伐としている今の社会状況の中、小中学生のモチベーションを上げるという目で東京オリンピックには期待している。スポーツだけではなくやはり文化を振興していくというのは非常に大事だと思う。
- 大人だけでなく子どもたちにも、見るだけではなく体験をさせて、それが何か発表につながる等、学校教育ではできない体験を文化施設でさせてあげるような取り組みがなされたらよいという夢がある。
- 高齢者に対するの取り組みとして、高齢者福祉施設で何かしらのソフトを持っていく出張事業等の取り組みを増やしていき、高齢者の文化振興もあわせて何か考えられないだろうか。
- 文化財保護審議会の活動のひとつとして、指定文化財ではなくて最近では地域文化財という概念を入れて、地域の貢献といったものに注目して認定を行っている。このほか、まだ指定文化財になる前のものとして登録文化財というものもある。
- 神楽坂の赤城神社境内にビルが建ったときに、業者が石像を全部捨ててしまったと最近聞いた。それまでに登録文化財に指定しているものがあつたら、恐らく建築側も考慮してくれたのではないかと考えると、野外にある文化財の指定を急いでやらなければならないと思い、現在進めている。文化財の指定等が新宿の文化芸術振興や、新宿フィールドミュージアムに非常に関係が深いのではないか。
- 新宿のイメージというのは、新宿駅を中心にした歌舞伎町あたりのイメージが強いようで、最近では神楽坂エリアも大変注目されているが、やはり広域マップの分類・エリア感は非常に大事な概念である。
- 新宿というまちは新宿駅中心だけではない。区民は知っていることだが、他区の方に新宿のイメージを持ってもらうときには、発信する側としては、神楽坂、高田馬場、大久保、下落合エリアといったエリア感が大事になってくる。
- 最近では、特に四谷エリアが気になっており、東京オリンピックが近づくと荒木町が全部きれいになってしまうのではないか、建てかえられてしまうのではないかという単なるうわさという心配事がある。

- 荒木町は武家屋敷跡として建物ではなくて土塀とかそういうものが残っているので、登録文化財でもいいから早くあの辺りを指定していき、土地の記憶として残していきたい。
- 百人町の鉄砲組百人隊も地域の方から申請があって区の登録無形民俗文化財として登録されたものだが、現在では鉄砲組の名残は何もなく、なかなか鉄砲も集まらない中で、百人町という地名からも百人隊を残しておくために、地域のお祭り等で出陣式の実演をやっていた。
- 新宿区民だけではなくて、新宿区にはいろいろな土地から多くの人が転入してくるということ、それから外国の方がたくさん来ているということも念頭に、様々な課題について考えていくといいと思う。
- 新宿フィールドミュージアムは毎年拡張していて、非常に多くの方々、非常に多様な方々が参加し、また民間の市場ベース、チケットを買って参加する方も含めて、非常に多様な活動が含まれており、定着しつつあると実感している。
- 東京オリンピックの話は明るいニュースであるが、政策論的には、縮退社会の中で最終的にどうやってソフトランディングしていくのか、また、グローバル経済の中で自治体はどうやって何で食べていくのかというようなことが、いわゆる成熟社会である日本においては非常に大きな喫緊の、公共政策の上でも大きな課題である。
- 経済的な次の成長産業は何かというようなことにどうしても議論が行きがちで、その中で豊かに生きていくということはどうやって実現するのか、その難しさを日々痛感している。
- 例えば、国土審議会では、アジアの成長を取り込むとか、リニアモーターカーの導入によってスーパーメガリージョン（超広域経済圏）をつくり東京～大阪間は日帰りで移動できるようにする等の議論がなされている中で、日々の生活の質をどう確保するかという点は議論にもならない。
- オリンピック競技大会に関しても、開催まではいいが、実施後のことを考えなければならない。また、現在イギリスでも補助金はかなり切られていると聞く。補助金に頼らない方策が求められている。
- オリンピック競技大会に関しては、建物をつくって壊すという減築という考え方を採り、大きくつくってオリンピック競技大会に対応し、最初から残す部分とそうでない部分を決めておき、オリンピック競技大会が終わった後は市民向けに規模を縮小し将来の異なる利用目的のために改造して使っていくという手法もある。そういう長期的な視点を持ちながら東京オリンピックもうまく活用していかないと難しい。
- 公の役割とは、ハードもソフトも含めインフラ整備にあるのではないか。
- ソフトの部分は補助金や助成金を想定しがちだが、これまでのいろいろな調査から見えてくることは、大きな助成金を出すマーケットでは、例えば、その地域の身の丈に合わない量のマーケットやアートイベントをやると、補助金がストップしたときに大きな反動が来る。そうすると、いろいろなアーティストが失業し、結局、体力のある大きなマーケットに戻っていつてしまったり、今までやっていたアートイベント等を縮小するだけでは足りずにストップしてしまったり等が起き、逆に大きなネガティブインパクトとなってしまう。
- 急激な変化があると、世の中に大きなネガティブなインパクトを与えることがあるため、持続的な長期的な展望に向かって、プランAもプランBも少しずつ考えながら、戦略を考えていく必要がある。
- これまではサプライサイド（供給する側）の研究が多かったが、一般のタックスペイヤーやそのテリトリーのターゲットグループの気持ちを聞くというデマンドサイド（需要する側）に対する調査・研究がなされている。
- 文化に関しては、文化財系はデマンドサイドが負担してもいいと納得できる分野のようである。一方で、劇場、パフォーミングアーツ、コンテンポラリーアート等の芸術系の分野では、

それらを好きな人が金銭的にもサポートすると思われる節があるが、芸術系の分野をすごく好きで巨額のお金を払っていいという人が、ごく少数だが存在する。

- 文化財に関しては地方自治体、国が一定程度負担し、守っていくことにコンセンサスがある一方で、ソフト系事業に関してはできるだけその興味関心がある方、それから興味関心がある方をサポートしたいと考えている方がお金を負担するという考え方が見えてくる。
- ミュージアムや劇場に関しては、自分はそのには行かないが自分の家族が行くとか、友人が楽しんでいるとか、まちのイメージが上がるからいいとか、自分はチケット買わないが少しなら行政が税金を投入してもかまわないと考える人が多少なりともいる。
- デマンドサイドの調査から見えてくることは、文化財の分野は行政が一定程度負担して、劇場とかパフォーミング系は、どちらかというところマーケットでやり、ミュージアムはその中間程度であろうという研究成果が得られている。
- これからは、よりアカウントビリティとかタックスペイヤーの気持ちとかを考えていく必要があり、文化財行政に予算を投じることに對しては一定程度のコンセンサスを得られるであろうし、ミュージアムや劇場をインフラとして整備していくということにも多少はコンセンサスを得られるだろうが、ソフト事業に関してはよりマーケットを意識して、例えば、協賛していただく企業、NPO法人、個人等の力を得ないと、今までのような活動がなかなか難しいのではないか。
- もしこういう考え方がある程度当てはまるのであれば、このことを意識した戦略性を持った制度、仕組み、体制等をつくっていくということも今後考えていく必要がある。
- 区内にあるいろいろな地域資源を顕在化するという点では、区内には中村彝や佐伯祐三のアトリエ記念館もあるし、現在も漱石山房の復元に向けた取り組みも進められている。また、この10月には新宿中村屋がリニューアルオープンし、美術館も併設すると聞いている。
- 地域資源には、建物等のハードだけではなくて、地域の名称、土地の記憶も非常に重要であり、文化とは記憶の蓄積でもあるので、地域と深く結びついている地域資源にまつわる歴史等も将来に伝えていってほしい。
- 新宿には歴史もあり、自然もあるので、それをどのようにフィーチャーしていくか、更には活用していくかが大切である。
- さまざまな企業、NPO等が主体の文化活動として、新宿フィールドミュージアムが展開しており、本当にいろいろな事業がなされている。この取り組みを広く発展させるために、核となるイベントがあったらよいのではないかという話も出ている。
- 今回の横浜トリエンナーレでは映像作品が非常に多くなってきているとのことで、いわゆる美術等は映像文化に非常に大きく傾斜しているところもあるようで、一般の方でも写真や映像作品をつくっているような状況にあるので、例えば、新宿フィールドミュージアムの一環として、新宿文化センターで全国対象のコンペイベントはできないか。
- 全国的に注目される取り組みとして、新宿ではどういうことが可能か、どういうテーマで企画すればいいか。映像文化、漫画文化といった、いわゆるサブカルチャー等に関しては文化庁でも取り組んでいるようなので、そういったことを全国的な形で新しい文化祭みたいなものができれば面白いと思う。
- 子どもたちに対する文化芸術振興も、とても重要である。
- 大原美術館でも子どもに美術館に来てもらい、幼児教育から美術館に親んでもらう、作品と触れ合うということをやっている。
- 休館日を使って子どもたちに絵を見てもらい、作品を通じて、自由に自分の絵を描いてもらおうと、子どもたちは睡蓮の池を見てその中にカエルを描き込む等、本当自由な発想を持っていてたいへん興味深い。

- 音楽や文学でも構わないが、新しい物語、絵本を読むと同時に新しい物語の発想を引き出すような感じのイベントを実施するとか、いろいろなやり方があり、こうした取り組みも大変重要だろう。
- 行政としてどういうことができるのか、あるいは行政にどういふことをしてほしいのかを、これからもこの会議で議論していきたい。
- ターゲットはもちろんまずは区民だが、東京オリンピックとの関係で外国の観光客が増えると思われるし、新宿区は東京23区の中でも外国人住民や外国からの来街者がそもそも非常に多いので、外国の人に対しても区の文化芸術の振興策を考えなくてはならない。
- 文化芸術振興基本条例でも、区民というのは住んでいる人だけではなく来街者も「私たち区民」だとしているので、この文化芸術振興会議は、私たち区民のために頑張ってきているが、それは住んでいる人だけではなく、来街者、地方からの学生、一時的な滞在者も含めて「私たち区民」のためにいろいろと考えていきたい。
- 外国の方に対してどういう形で発信するか。例えば、標識や看板やメニューに英語を併記するとか、どういう形でコミュニケーションをとるかという問題も含めて、具体的には美術館等でも考えている。
- 来街者に対する区民のおもてなしが東京オリンピックでは大切になる。文化イベントと同時に、日本文化を知らせ、実際に体験してもらうために、どういうことができるだろうか。この会議としてどのような提案ができるのだろうか。
- この会議の進め方として、まずは専門部会で議論、論点整理のうえ、第3期のテーマになる議題を提案してもらい、それをこの全体会議で承認して、調査審議事項を決定したい。

8 専門部会の設置及び専門部会員の指名

新宿区文化芸術振興会議規則第6条の規定に基づき専門部会の設置が決定され、同条第2項の規定に基づき、高階会長が、垣内副会長、大和委員、舟橋委員を専門部会員として指名した。

9 事務連絡等

第2回目の会議は、1月～2月頃に開催予定とし、日程や会場等については、別途事務局から連絡することとした。また、専門部会は、部会員と相談のうえ、11月～12月頃に開催予定とするとした。

10 閉会

会長のあいさつをもって、午前12時に閉会した。